日本福音ルーテル教会　教会史資料編纂委員会ニュース

歴史は語る

2016年12月15日発行　第11号　　編集責任者　青田　勇

特集「東京学生センター」

東京学生センター伝道と市ケ谷土地取得

青田　勇

日本福音ルーテル教会（以下、JELC）の事務局、市ケ谷教会、それに本教会の収益部門が運営する市ケ谷センターが置かれている「市ケ谷砂土原町1－1」の土地の由来と63年前にこの土地で設立された「東京学生センター」の端緒的な活動について触れたい。

東京の都市圏に学ぶ大学生を対象とした「学生センター計画」がJELCにおいて公的に最初に諮られたのは1950年1月12日に熊本のミラー宣教師館宅で開かれた常議員会であり、そこで学生センター設置委員会の件が協議され、「学生センター設置のため、ウッド姉、スタイワルト、岸、福山の4氏を委員として委嘱」することが決定され、東京における学生伝道の活動が胎動を開始した。

土地の取得費とセンター建設費という膨大な資金を賄うことは当時のJELCの手には余る難問であったので、北米一致ルーテル教会（以下、ULCA）の海外伝道局からの支援に全面的に頼らざるを得なかった。

東京学生センター建築の鍬入れをする
田坂牧師とヌーティング宣教師

三カ月後の1950年4月28日、熊本で開催された常議員会ではその資金をULCAの顕現節『エピファニー献金』から700ドルを投入し、この資金をもって学生センターのための土地を購入することを確認した。なお、当時の円とドルの換算によれば7000ドルは250万円となる。

1950年5月1日、熊本のミラー宣教師宅で開かれた宣教師会（JELMA）の総会では設置委員会の報告を受けて「東京学生センター」計画案に関して決議をしているが、そこを抜き出すとこのようになる。

「青年伝道として全ルーテルの学生センターを東京で設立ための計画案と資金の用立てをJELC常議員会が取ることを要請する。この事業計画を共に推進して行くためにボードに2万ドルを要請する。アメリカのルーテル学生協会、他のルーテル教会のボード及びアメリカでのルーサーリーグと共にこの計画推進することをボードに要請する。」

さらに、設置委員会は東京学生センターの伝道目的と想定される場所を含めた最初の計画案の主な骨格を次のように提案している。

「目的：(1)大学生へのキリスト教的伝道を目的とする学生センターを設置する。

(2) 25名～30名の学生を対象にキリスト教的精神に基づく、寮の提供。

場所：学生センターの候補地としては以下の地域を考える。

1御茶ノ水　2神田　3飯田橋　4小石川　5麻布地域

建築計画：伝道集会を想定した大会議室、図書館、聖書研究のための部屋、食堂、25名から30名の学生のための寝室を伴う寮、台所、日本人牧師のための牧師館、その他、信徒及び学生職員の寄宿舎。もし可能ならば、別棟に礼拝堂を設置する。

確認事項：必要土地面積約400坪」

ULCAにとっても、日本宣教での未知の伝道計画である学生センター建設を実現させるためには、資金面での手立てが重要である。そこで、1950年6月21日のULCAのボード会議は土地取得のための資金だけでなく、建物建築資金も賄うために20000ドルを予算化することとし、アメリカのルーテル学生協会、他のルーテル教会のボード及びアメリカでルーサーリーグに計画の協力を得ることとした。

第一に優先的課題となった土地の取得は、１９５１年初頭より、設置委員会の委員長であるA・J・スタイワルトが主導的に取り組んだ。ただし、その取得の実現にはいくつかの曲折を経なければならなかった。その彼の積極的な歩みはスタイワルト日記を１９５１年２月から９月にかけてめくることによって明らかになる。

その彼の日記から注目すべき部分を拾い上げていくと、当時の不動産屋から紹介されて見聞した候補として挙がった土地は中央線沿いのお茶の水駅、四ツ谷駅及び市ヶ谷駅の近郊とそれに牛込弁天町などである。

半年以上にわたって、精力的な努力を傾けて最終的に選定した候補地は市ヶ谷砂土原町の土地である。これを不動産屋（池田氏）からスタイワルトが紹介されたのは、１９５１年８月31日（金）である。これを彼の日記（９月１日付）から語らせてみると、つぎのようになる。

「昨日、午前、市ヶ谷で池田、岸、本田と会い、学生センターのために売りに出ていた適当な土地を見た。５０５坪で値段は一坪、６６００円。不動産屋池田は更なる値引きに努力すると言った。」

次の週の火曜日の９月４日午前10時より、平井議長と学生センターの牧師となる田坂惇巳も現地をスタイワルトと共に見た。次の日の９月５日、スタイワルト宅にて設置委員会を開催し、土地取得の決定を行った。スタイワルト日記には、その時の協議内容として土地の坪数、価格総額が伝えられている。

「委員会は市ヶ谷から６分あまりの土地５０５坪を買うことを決定した。価格は一坪６３００円で，総額は３１８万１５００円である。寮委員会は岸、平井、田坂であり、私が委員長である。」

翌週の９月10日、スタイワルトは不動産屋と共に土地の所有者である木下家の人々と西銀座で会い、具体的売買手続きを確認している。

この市ヶ谷砂土原町１−１の土地台帳の過去歴を見ると、この時点での土地所有者の名義人は「木下ろく」である。彼女は木下重作氏の妻であり、１９５１（昭和26）年に夫が死んだ後、この土地の財産を引き継いだ。　木下重作氏は１９３９（昭和14）年11月から市谷砂土原町１−１の土地の所有者であった。付け加えれば、木下重作氏は静岡県生まれで、北京製氷冷蔵（株）会社社長と焼津冷凍（株）会社社長であった。

設置委員の一人であった岸千年は、『市ヶ谷教会50年史』の中で、この市ヶ谷の土地の確定の経緯とその由来について興味を引く言葉を残している。

「私がよく記憶しておりますのはスタイワルト先生ら４人ぐらいで、都内のあちこちを探して歩いた事です、・・・・土地売買を斡旋する不動産屋がおりましたので、そこの紹介で物件を見て歩きました。その候補の一つが、市ヶ谷砂土原町の現在地だったわけです。あれは、御存じのように、若槻礼次郎元総理官邸跡だったんですが、大きな防空壕と、起伏に富んだ傾斜地と焼け跡にぽつんと残った小さな古びた建物が印象的でした。」

ここで注目を引くのはこの市ヶ谷土地に「若槻礼次郎元総理官邸跡」であったと言う言葉であるが、大正時代からの登記簿を調べてみても、土地所有名義として若槻礼次郎の名前は見当たらない。

若槻礼次郎は、島根生まれで、東大を卒業後、大蔵省に勤め、大蔵事務次官を経て、貴族院議員、第３次桂内閣及び第２次大隈内閣では蔵相、加藤高明内閣の内相、１９２６（大正15）年に首相となり、有名なロンドン海軍軍縮会議では首席全権を経て、１９３１（昭和６年）再び首相に就任している。若槻礼次郎の自伝である「明治・大正・昭和政界秘史」を読むと、そこには貴族議員になった頃は、邸宅は市ヶ谷でなく、麹町の中六番町であったことが記されている。

前述の岸の言葉を確かめるための決め手となる資料は「渡部寛一郎宛若槻礼次郎書簡」である。これは若槻礼次郎の漢学・漢詩の師である渡部寛一に宛てた書簡である。これによると若槻が１９２２（大正11）年３月７日から１９２５（大正14）１月５日の間に出した書簡の封筒裏の住所は「市ヶ谷砂土原町１−１」となっている。この土地に関する過去の土地台帳を調べても、土地所有者の名義人には若槻の名前は見当たらないにしても、「渡部寛一郎宛若槻礼次郎書簡」を手かがりに推論してみると、若槻は１９２２年頃から市ヶ谷土地を木下家から賃借りして、約４年間、その家を個人的邸宅として一時的に住んでいたのではないかと、想像される。

追加すると、市谷砂土原町１−１の土地は江戸期には紀伊新宮藩水野家の上屋敷があり、その石高は３万５０００石であった。横の坂は「浄瑠璃坂」として有名であり江戸の三大仇討の事件があった場所である。

土地の登記は約半年後の１９５２年４月９日に「日本福音ルーテル教会」の名義で完了している。

なお、ここで一つ付け加えておくと、土地取得確定後、学生センターの伝道対象をめぐって設置委員会の中で意見の対立が生まれ、スタイワルトは男子だけに絞ることに固執し、委員長辞任を１９５１年12月に申し出ている。

１９５２年秋に礼拝堂を含む学生センターが総工費５６６万２千円で建築工事が着工、翌年の４月に竣工し、第30回総会の直前の５月３日に献堂式を行い、総会会場として使用された。

但し、寮設置は資金面の問題もあり、１９６０年10月のクライダー記念学生寮竣工式まで待たねばならなかった。

東京学生センター初期の活動

中川浩之

１９５２年の第29回教会総会において、既に取得されていた土地に学生センターの建築を進める事が決定され、間もなく工事が始められた。同時に理事会が新たに組織され、牧瀬雄吉を理事長に、田坂惇巳、クヌーテン、岸千年、村井資長、来日間もない宣教師ヌーディング（総主事）が選任された。

その前年、ヌーディングはバーバラ夫人とともに来日し、学生センターと同時期に購入された千代田区一番町の宣教師館に入った。建物は洋式であったが庭には灯籠があり、芝生の広い庭がお気に入りであった。

学生センターへの任命を受けて来日した夫妻は、市ヶ谷に学生センターができるまでの間、自宅のリビングルームで礼拝を行っていた。記念すべき最初の礼拝は、1952年6月1日（日）の朝であった。出席は既に学生センターの責任者に任命されていた田坂惇巳牧師家族と、新婚間もないヌーディング夫妻だけであったが、礼拝の途中で二人の学生が外の張り紙を見て入って来た。中を見て二人は気まずそうな顔をしてそのまま帰って行ってしまった。

学生にアピールするために考えた夫妻は、礼拝が終わると、庭で、この家に前の住人が残していった卓球台を外に持ち出して卓球をしたり、バドミントンやクロケー（ゲートボールの原型）といった遊びをして楽しんだ。当時はこのようなレクリエーションの施設や道具もなかった時代、こんな遊びも学生にとっては魅力的だった。また夫人が時折作ってくれたクッキーやケーキなども、まさしく「アメリカの味」である。こうした努力で礼拝にも次第に学生が集まるようになり、やがては毎週30人ほどが集まって、時にもてなしに手が回らず、〝お弁当を持って来て〟とうれしいお願いをするまでに増えて行った。亡くなった元ルーテル学院理事長石原寛も、この庭で遊んだ学生の一人であった。

建築中のこの時期に、学生センターの性格を検討するために、都内の教会の青年有志たちが集まり協議をしたとの記録（市ヶ谷教会50年史：徳善義和）によれば、都内の学生が市ヶ谷に取られてしまうのではないかとの危惧も大きかったという。それもあってか、総会では「学生センターは教会ではない事、コングリゲーションを持たない事」と定められた。

１９５３年5月3日、正式に「東京学生センター」と命名され、献堂記念礼拝が行われた。牧瀬雄吉牧師による説教、ファイル宣教師の奏楽で、１５０名の参加者が会堂を埋めた。礼拝後には北森嘉蔵の記念講演があった。

献堂式後も建物周辺の片付けや整地の必要があったので、1週間にわたる学生たちのワークキャンプが夏休みを利用して行われた。これには東京周辺の教会の学生の参加が多くあった。

当時青年信徒層によるルーサーリーグの運動が全国的にも盛り上がっており、そうした背景のもとで新しく設立する学生センターへの期待は大きなものだった、とキャンプに参加した上道信義は述懐している。

屋敷内にあった古い住宅は解体移築され、牧師館として、後に教会事務局の部屋が増築されて、市ヶ谷センター建設時まで用いられた。

またこの年の6月に九州地方で61年ぶりの集中豪雨があり、多くの被害が出た。学生たちは即座に救援のために立ち上がり、新宿駅前などで募金活動が行われた。その様子は新聞にも大きく取り上げられ、話題となった。

礼拝は田坂、ヌーディングにより千代田区一番町の宣教師館のリビングルームで毎週行われ、１９５２年のクリスマスには、3人の受洗者が生まれた。この毎日曜の礼拝は市ヶ谷にセンターの建物ができるまで続いた。

建物完成後は、市ヶ谷に移り、まだ足場も残る新しい礼拝堂で、2名の第2号受洗者が生まれた。こうして、１９５３年のクリスマスまでの1年間に17名の受洗者が与えられた。しかし〝教会ではない〟学生センターであるために教籍をどうするかが問題になった。その結果17名は、当時の総会議長・学生センター理事長平井清の牧する都南教会に置くことになった。翌１９５４年には7名の受洗者が生まれた。学生センターは「都南教会の開拓伝道所」扱いで、便宜的に学生センター教会と呼ばれることもあった。

１９５４年5月総会において、「毎週70人から80人の学生が、礼拝に出席している」との報告とともに、学生センターの活動によって生まれたこれらのコングリゲーションを市ヶ谷教会と認めることが決議され、田坂を都南教会の、牧瀬を市ヶ谷教会の牧師として任命した。

1953年5月3日東京学生センター献堂記念礼拝

「教会にしない」と決議しながら「教会になった」ことについて、後に坪池誠（１９５４年当時事務局長）はこう述べている。（市ケ谷50年史）『市ケ谷教会はイサクにあらずしてイシマエルだ』という人がいるが、私はこの説には同調しない。田坂牧師の持つ個性、召命に応える熱心の吹き出しが市ケ谷教会を生んだのだ。この出来事こそ一番大事な本質的な事であり、聖書の示す第一義的なものであった。」

これによって都南教会に置かれていた十数名の教籍は、本人の希望により、都南教会にそのまま残るか、新しい市ケ谷教会に移すかの選択が行われ、約半数が市ケ谷に戻ることになった。新しい建物で始まったプログラムは、当初はヌーディングによる大学生の英語バイブルクラス、夫人による高校生バイブルクラス、田坂による聖書研究、ファイルによる讃美歌練習、等であったが、次第に指導者の人材を得て多様な内容になっていった。

１９５４年４月には、千葉ベタニアホーム旭ケ丘保育園の園舎改修を行う1週間のワークキャンプが実施された。老朽化した建物の修理や、子どもたちのための木製ジャングルジムの製作などを行った。

教会の歴史には、今まで伏せられている部分がある。しかし、今後の教会の歩みを健全に整えて、正しく方向づけていくためにも、今まで書かれなかった裏面の歴史があることを心にとめるべきである。

平井清の後を継いで総会議長となった市ケ谷教会牧師牧瀬は、多忙を極めていた。当時は今日のように事務局体制が整っていない時代であったので、書類の整理や作成、会計処理、及びアメリカからの支援金の受理等を議長が中心的に処理していた。そのためセンターに来ている学生に、ヘルパーを有料で依頼する事も習慣的に行われていた。当時、日大院生であったKもその一人として、牧瀬の事務処理の手伝いをすることになった。牧瀬が受け取った請求書の封筒を開いてその費目を見ていると、不審な請求項目が多い事に気づいた。遊興に関する請求も含まれていたので、Kは当時学生センター主事をしていたM伝道師と共に、親しい宣教師ダウキンズに相談した。

ダウキンズはすぐ上司のマイヤー宣教師会長に伝えると、当時の事業資金のすべては北米一致教会から送金されてきたこともあり、ボードの責任者が来日して調査が始まった。やがてこれが公のものとなり、英文で報告書が作成され、ボードの議事録に残された。

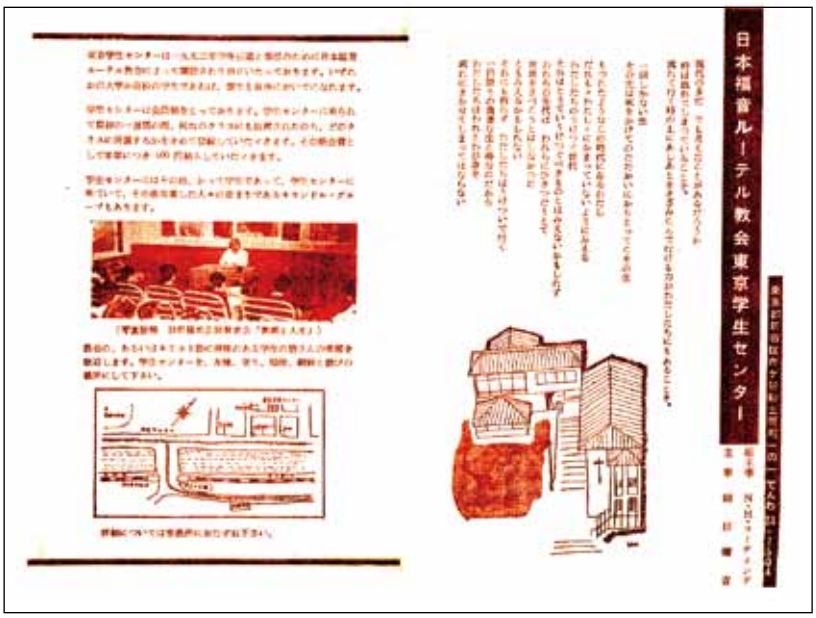
これによって１９５６年1月、牧瀬は解任された。牧瀬の後を継いだ岸議長は、教会の歴史としての禍根となった事柄の一端を、当時の個人的苦悩と共に市ケ谷50年史のインタビュー記事で語っている。また、若かった多くの会員の純粋な信仰にも、大きな衝撃を与えることとなった。

教会、学生センターの牧瀬の後任としては、ヌーディングを市ケ谷教会担当牧師、学生センター総主事とし、礼拝は真木政次および歌野繁次の二人の伝道師があたったが、5月総会で正式に内海季秋が市ケ谷教会に任命され、年末に赴任した。

翌１９５８年には、神学校を卒業して牧師補となった岡田曠吉が、ヌーディングを補佐する東京学生センター主事に就任した。初めての日本人専任スタッフを迎えて、毎週のプログラムは充実したものとなっていった。ちらしを印刷して、周辺の高校、特に女子学院、大妻、嘉悦、三輪田、共立などの女子校を中心に登下校時に門前でちらしを配布し、集まる学生数も急激に増えていった。

それまでのヌーディング夫妻の英語バイブルクラスに加え、岸・神学校長による求道者向きの「センター・ゼミナールA」、同じく東京女子大・宮本信之助教授による大学生によるキリスト教共同研究「センター・ゼミナールB」、学生キリスト教友愛会（SCF日本基督教団の学生センター）主事・賀川梅子と岡田による聖書研究などの高校生グループ「サフランの会」、ドイツ学生協会主事・グンター・ドレスラーによる「ドイツ語聖書研究」、千葉教会牧師・徳善義和の「ディスカッション」、岡田の「キリスト教入門」、徳善義昌の「コワイア」、フランス文学者・辰野隆による「特別講演会」など、いずれも質の高い内容であった。

内海は学生センターには直接関わらず教会専任となり、学生センターが組織的にも安定した運営ができるようになると同時に、創設当時学生であった市ケ谷教会員も卒業して社会人になっていくにつれて、学生センターと市ケ谷教会は、それぞれ独自の道を歩み始めるようになっていった。（文中敬称略）



プログラムへの参加を呼びかけるらし

市ヶ谷土地取得と東京学生センター設置の経緯(『スタイワルト日記』)

1950年1月12日	JELC常議員会「学生センター設置のため、ウッド姉、スタイワルト、岸、福山の４氏を委員として委嘱」
4月28日	JELC常議員会「設置委員の報告を承認し、エピファニー献金中の7,000ドルを以って土地を購入する、建築に関しては別個に考慮する。」
5月1日	JELMA 総会決議　JELC常議員会が学生センターを設置することを2万ドルの予算で実施することを提案。
6月21日	ULCAボード日本委員会「東京に学生センター設置:を7,000ドルの予算で提案し、JELCに在日全ルーテル教会の協力を得て、事業を推進することを申請する。」
7月20日	JELC常議員会「東京に新設する学生センターに関して在日全ルーテル教会に協力を要請する」
12月26日	スタイワルト日記「午後7時、学生センター委員会に出席、ウッド婦人宣教師宅にて、ＥＬＣとオガスターナの代表も出席した。寮の計画は除くこととした。」
1951年2月20日	スタイワルト日記「午後1時、学生センター委員会の下で、お茶の水で岸と会い、幾つかの場所を見た。」
4月5日	スタイワルト日記「9時半から10時半までバイブルクラスをした後、学生センター委員会として、四ツ谷駅に行き、前に見た土地を視察。瀧本、青山、牧瀬、、それに委員として岸、田坂、林と私が行った。その土地は800坪で、坪単価7,000円。良い場所であるが、予算的に問題が残る。」
4月25日	スタイワルト日記「11時に市ヶ谷駅で不動産屋・高村氏と田坂に会った。高村は売却に出ている二つの土地をみせた。最初の土地は学生寮に適切な場所であった。そこは市ヶ谷駅より、8分ほどの所で会った。田坂と私はすでに見ている四谷見附近くで杉田氏に会った。彼は坪6,000円を要求したが、それは予算を超えたものであった。」
6月20日	ULCAボード　学生センターの特別予算　13,000ドルを計上。
6月20日	ULCAボード　ヌーディング宣教師を日本に派遣、９月10日、日本に出立。
8月18日	スタイワルト日記「A.M.マイヤーと私は池田と共に学生伝道のための適切な場所として、牛込弁天町の900坪とそこにある大きな屋敷を見た。価格は7,500,000円。私は田坂、岸、それに平井に手紙を書き、月曜日の朝、そこを見に行くことを求めた。」
8月25日	スタイワルト日記「午前中、岸、青山、平井はｽﾃｰｼｮﾝﾜｺﾞﾝで駅から不動産屋・池田氏の案内で、牛込弁天町の家を見た。だが、その物件はすでに売却されている事が判明した。」
9月1日	スタイワルト日記「昨日、午前、市ヶ谷で池田、岸、本田と会い、学生センターのために売りに出ていた適当な土地を見た。505坪で値段は一坪、6,600円。池田は更なる値引きに努力すると言った。」
9月4日	スタイワルト日記「午前10時、池田、平井、田坂と市ヶ谷で会い、そこの土地を見た。平井と田坂はこの土地が良いと思っている。明日、私の家で委員会を開くこととした。」
9月5日	スタイワルト日記「2時過ぎ、学生寮委員会を開き、市ヶ谷から6分あまりの土地505坪を買うことを決定した。価格は一坪6,300円で，総額は3,181,500円である。寮委員会は岸、平井、田坂であり、私が委員長である。」
9月10日	スタイワルト日記「午前、本田、坪池と私は不動産屋・池田氏と共に西銀座に行き、建物と共に512坪の土地を坪6,300円で売却してくれる木下家と接触した。最初の手付として800,000円を支払うことと、不動産手数料として50,000円とした。Chase Bankに行き、池田に５万円を現金で渡した。12月中旬までは市ヶ谷の土地を取得することはできない。」
9月11日	スタイワルト日記「池田、岸と市ヶ谷駅で会い、大きなコンクリートの家二つを追加することでの149坪の土地を見た。そうなると合計600坪になる。こうなると市ヶ谷の土地は14,000,000円となるが、池田はこれは12,000,000円になると言う。」
9月13日	スタイワルト日記「学生センターの建物について検討した。これは予算を超えたものであると判断した。」
9月19日	スタイワルト日記「午後３時から5時、平井、岸、田坂と私は学生センター委員会を持った。9月５日ら決めたことを確認した。」
10月4日	スタイワルト日記「夕方、岸、田坂と私は学生センター委員会を開いた。平井は欠席、検討対象になっている建物の予算に関して協議した。そこで、神戸で開かれる常議員会に報告申請し、承認されれば、ボードから7,000ドルが送金されることになるので、このための報告申請書を私が書くことになった。私は３人の日本人の委員に失望した。彼らはこの計画を男女両方のための学生伝道として提案することを望んでいからである。私はこれに強く反対した。なぜなら、一つの施設に男女がともにかかわることは危険であると思うからである。」

10月8日	スタイワルト日記「市ヶ谷で田坂と測量士に会い、測量士にその土地を見せ、ここを購入することを伝えた。田坂と私は小岩での牧師会に出席した。8名だけの牧師であった。夕食の後、平井に学生センターの報告を作った。10日と11日に神戸で開かれる常議員会に提出するためである。手紙で、学生センターは男女どちらか、またはその両方を対象とするかを決めることを求めた。もし、男女両方であるならば、私はこの委員を辞退したいことを告げた。」
10月10日	JELC常議員会「設置委員よりの報告を承認し、追加予算として、8,000ドルをボードに要請する。」
12月7日	ULCAボード　土地購入の報告。
12月7日	ULCAボード　JELC事務局設置のための予算申請(3,556ドル)
12月12日	スタイワルト日記「本田、坪池、木下が私の家に市ヶ谷の土地に関する所有権移転の協議のために来た。不動産屋の池田は来なかった。」
12月27日	スタイワルト日記「夕方、学生センター委員会を開いた。田坂と平井は欠席で、出席者はK.平井、岸と私であったが、坪池も来たが、市ヶ谷の家の補修について話し合った。学生センターが合意していないいくつかの件について協議し、委員会を解散することに一致した。センターを男女両方を対象とすることに私は反対した。だが、他の委員は男女両方の学生センターとすることに賛成した。田坂は寮を除いた勉学とリクレーションホールを含んだ学生のための教会としていくことを希望した。岸は、寮設置を求め、それにリクレーションホールを作ることを希望した。いずれにしても、すべての委員はここで辞任し、常議員会に新たなる委員会を設け、委員を指名してもらうこととした。私は辞任の申し出をしたが、平井はそれを受理しなかった。」
1952年1月11日	JELC常議員会「学生センター事業の準備の時期を完了し、従来の設置委員に代わる、新たなる次の5氏（大内(長）、青山、坪池全、平井正徳、クヌーテン）を委嘱し、事業の発足をすることとした。」
4月9日	市ヶ谷砂土原町の土地登記
4月23日	JELC第29回総会　学生センターに関する決議。　土地取得がなされていることもあり、また寮設置の要望も考慮して理事会構成を選任する。理事会(牧瀬雄吉、岸千年、クヌーテン、田坂惇己、村井資長)構成を定める。
4月23日	JELC第29回総会　「前総会以後、本教会が取得した土地建物報告。学生センター土地購入、3月15日。」「決議委員会報告。学生センターの問題は既に土地も購入されて実施の域に達しているので、速やかに実現を見ることを希望する。但寮設置の要望も強いので、之が実施も急を要することを認める。故に委員会の要求する如く、5名の理事を総会は選任して、之が緊急実施に当たるよう要求する。」「緒委員。学生センター理事、牧瀬雄吉、岸千年、ｸﾇｰﾃﾝ、田坂惇已、村井資長」
6月17日	JELC第30回総会期第1回 学生センター理事会 建築予算の確定(飛鳥匠事に発注、総工費566万2千円)事業計画検討
10月6日	JELC第30回総会期　第2回 学生センター理事会　寄宿舎問題　事業計画策定
1953年5月3日	学生センター献堂式
5月5日	JELC第30回総会　東京ルーテル学生センターにて
6月10日	JELC第31回総会期　第1回　学生センター理事会 (理事長・平井清、書記・青山四郎)
1954年1月4日	JELC第31回総会期　第2回　学生センター理事会
2月15日	学生センター理事会　被包括法人設立登記
3月19日	JELC第31回総会期　第3回　学生センター理事会　教会組織の件
5月4日	JELC第31回総会　学生センター事業報告
1960年10月30日	学生センター・クライダー記念学生寮完成

一番町宣教師館での礼拝

新しいセンターでの礼拝のあとで